

朝さろんの本棚 〈50〉

筒井康隆 『七瀬ふたたび』 について

50th morning:2015年8月20日(木)@渋谷

参加者:8名

『七瀬ふたたび』は、少数派と多数派の対立における排除の構造と神学的な問いを、暗喩的に、かつエンタテイメントとして描いた作品。

【テーマ】

〈ヒトの心理とエゴを“読む”(2)〉

- ⇒ 新シーズン:《ヒトの心理とエゴを“読む”》、筒井康隆の七瀬三部作を順に読み解いていきます。七瀬シリーズでは、三部作を通じて“自分とは何か?”という問いが投げかけられることになりま。 “SF”だからこその仕掛けにも注目しながら、永久不変の“自分とは何か?”という問いかけについて考察してもらえると、より一層楽しめるかと思えます。今シーズンを通じて新しく考えてみようと思うのは、例えばこんなことです。
- ◇なぜ70年頃に、文学界で(大衆作家も純文学作家も)SFというジャンルがこれだけ力を持っていたのか? 時代状況ともオーバーラップさせながら、SFという方法論の持つ力(特徴)についても考えてみたい。
- ◇主人公は同じでも、三部作のなかでテーマや手法がどんどん進化していきます。それを丁寧に確認してみましょう。 そのようなテーマや手法が、作品内容とどう結びついているのか、そこにどんな必然があるのか、考えてみたいと思います。

【本】

『七瀬ふたたび』 筒井康隆 (新潮社、1975) 文庫本:新潮文庫(1978)

【筒井康隆】

1934年9月24日生まれ。大阪府大阪市出身。動物学者の父・筒井嘉隆と母・八重の長男として誕生。1970年代からは、それまでのナンセンス、ブラックユーモアの作風に加えて様々な文体を用いた実験的な作品を発表していき、次第に熱狂的なファンを獲得していった。初期のよく知られている作品には、PTAによる悪書追放運動を批判した「くたばれPTA」や社会風刺からナンセンスな笑いを引き出した「ベトナム観光公社」、痴漢冤罪の恐怖を描いた「懲戒の部屋」などがある。1970年の第1回星雲賞を長編部門、短編部門で独占してから計8回同賞を受賞。また1968年から直木賞に3度候補として挙げられたが、受賞にはいたらなかった。筒井は後にこの経験から、作家志願者が文学賞選考委員を次々に殺していくスラップスティック作品「大いなる助走」を執筆した。1970年

の「脱走と追跡のサンバ」の発表を境に、自身の作品からは徐々に純 SF 的な作品が減少する。1972 年 4 月には東京から妻の実家に近い神戸市に転居。1980 年には日本 SF 作家クラブの事務局長として、徳間書店を後援とした日本 SF 大賞の創設に尽力した。一方で、1971 年より純文学雑誌「海」に作品の掲載をはじめ、純文学の分野にも進出した。1978 年には大江健三郎の紹介から「海」編集長埴嘉彦の訪問を受け、中南米の文学について教示をうけるなどして大きな影響を受ける。同年、登場人物が自身を虚構内の存在だと意識しているという設定の「虚人たち」で泉鏡花文学賞を受賞。これを皮切りに実験的な作品を多数発表。また、この時期にはストレスからくる胃穿孔を起こして入院し、入院中に読んだハイデガーに影響を受けて死や別れをモチーフにした作品も増えていった。

【ストーリー】

1972 年 10 月から 1974 年 10 月にかけて『別冊小説新潮』『小説新潮』に連作の形で発表された。「邂逅」(初出時は「七瀬ふたたび」)「邪悪の視線」「七瀬 時をのぼる」「ヘニーデ姫」「七瀬 森を走る」の 5 編からなる。読心能力を持つ火田七瀬の様々な超能力を持つ仲間との交流や敵対者からの逃亡を描く。第 7 回星雲賞を受賞した。

人の心を読む能力を持つ 20 歳の火田七瀬は、超能力者であることを悟られることを恐れ、家政婦の仕事をやめて母の実家へと帰ることにした。その途中、夜行列車内で同じく人の心を読む能力をもつ幼い少年リオと出会い、さらに予知能力を持つ青年恒夫に出会う。恒夫の予知で、列車が事故に会うことを知った七瀬たちは、途中の駅で下車し事なきを得る。列車事故から 1 年後、七瀬はアパートを借りてリオと二人、人目を忍んだ生活をするようになった。高級バーでホステスとして働く中、バーのバーテンダーだった念動力を持つ黒人青年ヘンリーと行動を共にするようになり、ホステス業で稼いだ金で北海道の石狩市に土地と隠れ家を購入。都会で多くの人と接する危険のあるホステスは危険だと判断し、ホステスを辞め、北海道の隠れ家を拠点にマカオのカジノで超能力を使って生活費を稼ぐようになった。しかし、カジノでの勝ちっぶりから超能力者であることがバレてしまい、超能力者を抹殺しようと考えている集団に命を狙われるようになってしまう。七瀬は仲間たちと協力し、敵の魔の手から逃れようと奮闘するが…。

【お題】作品を読んで次の問いについて考えてみましょう

1): 本作を読んでみて感じた率直なご感想を教えてください。特に、前作から連続して読んだときに、どんな感想を持ったでしょうか？

- * 性的なものが過剰であり好きな感じではない。後半にゾンビが出てきたりという、B 級ホラーみたいな雰囲気随所に出てくる気がした。「悪の組織」という設定に幼稚さを感じた。
- * テレパスという能力が全編を通じて主題になっているため、通常の小説のような個人の内面を掘り下げたり苦悩したり悲しんだりするような自問自答のような描写があまり出てこない(俗人的な悩みとは少し違う次元での苦悩がメインになっている)。特に三歳児設定でありながら非常に高度な知

性を獲得しているノリオの内的な苦悩に興味を覚えた。

- * SF っぽくない。スリラーのような趣がある。電話しているときの服装やネグリジェの描写など、直接関係ないと思われる部分での具体的で細かい言及がなぜなのか気になった。七瀬の勤めていたスナックが『ゼウス』だったことの意味深ぶりに興味を覚えた。
- * 前作『家族八景』に比してエンタメ性が増した。藤子の発言にあった“多元世界”のシーンはぜひもっと深掘りして考察したい。超能力者が生まれてくる理由の一つは多様性の確保ではないか。
- * 前作と違って七瀬がひとり(孤独)ではなく、仲間がいる。それによって七瀬の行動が変わっているのが面白い。超能力バトルを楽しく読んだ。
- * 男性登場人物の内面がガラガラし過ぎている気がする。前作からのテーマの変遷が面白い。ひとことで言えば“X-MEN”的。異分子を排除することの是非。恒夫の死の間際のシーンが美しい。

2): 本作(前作も)はかなり”読みやすい”という印象を与える作品だと思います。その”読みやすさ”はどんなところから来ているのでしょうか？

- * 現実世界ではブラックボックスとされている他者の内面を、一人称の語りによる内面の吐露だったり、三人称の語りによる内面の観察であったりするの一般的な小説だが、本作の特徴は、七瀬から見た時に他者の内面が丸見えな点。だからすべてが七瀬の目の前にさらされていて、推測する手間がない分だけ、読みやすさに繋がっている。
- * 会話の口語と同じように、内面も口語風な形式で語られるため、全編がテンポよく進み読みやすい。
- * 書かれている以外の問いや葛藤が基本的にはない。超能力者の宿命や葛藤、また SF 的世界観に基づく哲学的な問いなどは随所に仕掛けられているが、読む(作品を理解する)上で隠されている背景・情報というものがほとんどない。それは作品の奥行のなさ、ともいえるかもしれない。

3): この作品は、”(あなたの考える)優れた文学作品”に適うでしょうか？

- * マジョリティ(常人)と異なるマイノリティ(少数派)の存在やその対立・支配・排除の関係は、本作における〈普通人 vs. 超能力者〉のみならず他のさまざまな関係性の隠喩にもなっているように思う。
- * 超能力者が存在するのは何故か、という、存在の根本原因を問うことは非常に哲学的ともいえる。また、それだけでなく、多元宇宙の存在(可能性)の話など、複数の哲学的な問いかけや SF 設定が響き合っていて、とても考えさせられた。常人には窺い知れないもつとも高度な難問を抱えて生きているのが時間旅行者の藤子だと思う。
- * 七瀬が「テレパスのせいなのか、最近考え方が男性的になってきたように思う」という振り返りをしているところがあって、なぜそう考えるのか不思議だった。
- * 七瀬がヘンリーから欲望視されなくて憤るシーンに、女心の不思議というか、面白さを覚えた。

【**解題**】 『七瀬ふたたび』という作品について

●前作『家族八景』各編からのつながり

	タイトル	あらすじ	七瀬の動向
1	無風地帯	七瀬が家事手伝いとして遣わされたのは、夫婦と子供二人と、一見平凡な核家族。七瀬は『テレパス』の能力を使い、彼らの思念を覗き見る。温かい家族関係の裏側では、冷えた悪態と罵倒が飛び交っていた。	家政婦＝ 観察者 という基本的な立場に留まる。しかし、奥さんがテレパスであるかもしれないという疑念を最後に覚えるが、そこは観察者でありながら観察しきれていない七瀬の未熟ぶりと共に、謎のまま残される。一方、 自分以外のテレパスの存在 を予感させる話。
4	水蜜桃	男は定年退職を機に社会との接点を失い、家族からは疎まれる日々。彼の興味は地味ながらも美しい家事手伝い、七瀬に向いた。息子夫婦が旅行に出かけたある日の夜、性欲を滾らせた男は、七瀬に宛てがわれた寝室に忍び寄る。	観察者の立場にあった七瀬が、欲望の対象としてまなざされる＝ 被観察者 の立場へと転倒。 「さとり」「山父」という民間伝承と自分を比較する。主人から自分の身を守るために、 主体的にテレパスの能力を行使する 。〈自分の超能力のことを知っているただひとりの人間であるというだけの理由で、 どんなことがあっても抹殺しなければならない存在だった 〉〈保身のため、やむなく勝美の精神を圧殺する〉〈彼女の犠牲者〉。 生きるためには抹殺しなければならない「宿命」。 自己防衛のための攻撃的能力行使(1回目)
5	紅蓮菩薩	心理学を専門とする助教授の夫と、良妻賢母を自負する妻。夫は女学生と浮気し、妻はそれを察しながらも、気づかない振り。ある日、助教授は七瀬の珍しい苗字『火田』が、かつて超能力実験で高成績を残した男・火田精一郎と、同じだと気づき……。	七瀬の父・ 火田精一郎 と新三が研究生時代に師事した 樺島教授 の間には超心理学をめぐるある実験があったことが語られる。そのことで七瀬の身に危険が及ぶ。実験は7年前。その2年後に樺島教授は死亡(〈5年前急死していた〉)。火田精一郎は実験の5年後に死亡(〈一昨年、わたしが高校を卒業する前の年に〉)という出来事が明らかになる。〈 実験が中断したのは、樺島教授の急死が原因だった 〉。 〈なぜ自分は、こんなに苦しまなければならないのだろう、なぜこんなひどい罵倒を甘んじて受けなければならないのか〉〈生まれてはじめて七瀬は、自分の 能力を心の底から呪い、憎んだ 〉〈新三の手を封じるためには、彼に自分のことを忘れさせるほどの大きな、手に

			負えない厄介ごとをあたえればよい) 生きるためには抹殺しなければならない「宿命」。 自己防衛のための攻撃的能力行使(2回目)
--	--	--	--

⇒八つの家庭の個性的な問題を観察したり、巻き込まれたりする七瀬という表面的なストーリーを縦軸に、連作を通して年齢的・肉体的に成長していき、能力者としての様々な試練や葛藤を経験していく様子が、本作の横軸となって展開していくのが本作の特徴と言える。

⇒作中では、テレパス能力の行使は倫理的にどう許容できるか、原理的には倫理に反するはずの殺人(抹殺)が、それでもなお能力の行使が許されるとするならそのときの「条件」とはなにか、という問題を投げかけられる。単に超現実的な能力が描かれるだけでなく、そのような能力が存在する時に生じるであろう諸問題が見過ごされることなく、丁寧に煩悶される作品でもある。

◇第二作『七瀬ふたたび』との関連

本書のうち特に、「水蜜桃」での自己防衛のための能力行使＝殺人(精神破壊)、そして「紅蓮菩薩」での親子二世代に渡る、能力者とそれを駆る存在との戦い。テレパスという超能力を持つ存在の業と宿命を巡るこの二編は特に、サイキック・ウォーズ的な様相を帯びる第二作へと展開していく契機を秘めている(映画「X-MEN」のようなテーマが絡む)。

◇第三作『エディプスの恋人』との関連

「青春賛歌」と「亡母渴仰」の二編には〈エディプス・コンプレックス〉が共通するモチーフとして登場する。このモチーフは、より根源的な問いと共に、第三作「エディプスの恋人」において反復的に物語られることへと繋がっていく。

●本作『七瀬ふたたび』各編の構成

	タイトル	登場する能力者	内容
1	邂逅	ハリオ(3歳);精神感应能力者 岩淵恒夫(24歳);予知能力者	〈同じ超能力者とはいえ、予知と精神感应ではその能力の性質が大きく異なるのである。同胞として彼女を信じ切っている恒夫には悪い気もした…〉
2	邪悪の視線	ヘンリー;念動力者 西尾(28歳);透視能力者	〈西尾の存在を許しておくわけにはいかないわ〉〈彼女は超能力者としての本能と使命感のようなものによって、より強くつき動かされていた。同じ超能力者として、あんな邪悪な存在を許しておくわけにはいかないわ、彼を見逃すことはわたし

			<p>にとって危険だわ、と、七瀬は思った。どうせいつかは対決を迫られる存在だ、と七瀬には想像できたからだ><超能力者同士が異質の相手を抹殺しようとする行為は、ある意味で野獣同士の生存競争にも似ていた></p> <p><「わたしの心、父親に代るもの、わたしたちの民族の神にかわるようなもの、求めた」「<u>上位自我</u>っていうのよ」と、七瀬が教えた></p>
3	七瀬 時をのぼる	漁藤子(17歳);時間旅行者	<p><リオの純粋さが、自己保存の本能の下に埋もれていた七瀬の正義感を掘り起した><男は<u>刑事</u>だった></p> <p><(ではこの娘は、<u>最終的な超能力者</u>だったのだわ)></p> <p><藤子は<u>時間旅行者</u>であった></p>
4	ヘニーデ姫	真弓瑠璃;「?」(膨大な精神エネルギーによるとりとめのない思考)	<p><精神感应能力なんてものを持っていると、<u>考えかたが男性的</u>になってくるのだろうか></p> <p><テレパスの出現は、単に人類の進化の結果に過ぎないのだろうか。それにしたって自然は、テレパスを出現させた結果に自然なりの責任を持っている筈だ。それが自然自身にとって、よい状態にならなければならないという責任だ。自然とは、そういう機構を持っているに違いないものだからだ。では、<u>テレパスの発生によって人類とか自然とかに生じるいい結果とはいったい何だろう</u>></p> <p><中でも彼女をいちばん怒らせたことは、<u>超能力者というものは普通人を淘汰するために生まれてきたもの</u>だとする彼らの考え方だった></p> <p><殺人者は、自分自身が普通人でありながら、特殊な訓練を得て読心能力を身につけた自分を、人類の運命を握っているエリートだと思こんでいた。いわば自分を<u>超能力者</u>でもなければ普通人でもない<u>鵠的な立場</u>に置くことによって勝手気儘な行動がとれると決めこんでいて、しかもそれは<u>超能力者の殺戮という大使命の前には充分許されると信じている</u>のだ。その思いあがりと身勝手さが、七瀬にはどうしても許せなかった。></p>
5	七瀬 森を走る	敵の刑事たち;訓練によって自分の意識を隠せ、相手の思考も多少読める	<p><自分の意識が隠せるようによく訓練され、相手の思考も少しは感応でき、しかも超能力者を憎悪していて、皆殺しにたくらんでいる組織が存在するのである><どうやら意図的に発生させたと思える張本人がグループで行動している数人の刑事><その数人の刑事というのが、すべて<u>超能力者抹殺集</u></p>

			<p><u>団の連中</u>><<u>警察という組織</u>まで自分たちの為に最大限に利用しているという事実であり、それから想像できるその集団の規模の大きさ></p> <p><オストラシズム(追放・村八分)></p> <p><<u>超能力者は何のために生まれてきたのか</u>></p> <p><神様。なぜ超能力者をこの世に遣わされたのですか。人類を試すためだったのでしょうか。それなら、もしそうだとしたら神様、人類はまだまです></p>
--	--	--	--

⇒ 前作と大きく変わり、超能力者としての本能や使命感というものを自覚する七瀬。それゆえ西尾のように、透視能力を私利私欲のために悪用する人物に対する強烈な嫌悪感を抱いていた。しかし本作で描かれる世界観は、西尾のように超能力を悪用して普通人を食い物とするような人物もまた存在している世界であり、それゆえ<超能力者というものは普通人を淘汰するために生まれてきたものだ>と考える<超能力者抹殺集団>の連中から命を狙われることになる。

本作における西尾のような悪徳者の存在を考慮に入れるならば、超能力者抹殺集団は、普通人の(些か暴力的に過ぎるが)防衛本能として理解できないこともない。作品の持つこのような世界観のなかで、<超能力者は何のために生まれてきたのか>という自己の存在の根源に関わる神学的な問いが想起される。

マイノリティではあるが秀でた能力を持つ ESP の存在と、そのような能力を持たないことによる弱さ故に彼らを抹殺しようとする圧倒的マジョリティの普通者(刑事を含む大規模な組織)という二つの集団の対立と、多数派の数の力で疎外され排除されていく少数者の運命が描かれる。

●七瀬シリーズについて

<第一作『家族八景』は舞台が家庭である。第二作は国家である。第三作は神である。全体としてみると七瀬三部作は、家庭—国家—神を主題とする筒井康隆のスキャンダラス神学になっている。これがはじめから意図されたものかどうかはわからない。そして第三部『エディプスの恋人』はがぜんギリシャ神話のパロディ的再生になっており、ここからふりかえると、全体はオレスティア三部作に似てくる。(略)彼女のスケールは、逆ホームドラマには収まりきれないだろうと思っていたところ、超美人に変身して『七瀬ふたたび』に転生した。こんどは新生人類＝エスパーを抹殺せんとする特殊警察との戦闘である。(略)彼女は念動力や時航力を持っていなくて、相手の心を読みとる感応力をもっているにすぎないということだ。それが他のエスパーたちと組みあわせられると最強の武器になる。その組みあわせかたは読まれたとおりだが、情報力が力の根源になる、という筒井康隆の認識が興味深い。(略)描写力と作品の香気だけでも『七瀬ふたたび』は第一級の文芸作品だ。>

(「解説」平岡正明(1978)より)

●当時の文学研究の世界での筒井評価

〈(八十年代頃までの間)近代文学研究者の過半数は、筒井康隆を読んでいなかった。特に中高年層では、読んでいるほうが例外的だった。それはある程度予測していたことだが、問題はなぜ“読んでいない”かという理由だ。整理してみると、ほぼ三つのタイプに分けることができた。

まず第一のタイプはきわめて単純で、読む機会がなかったというものだ(…)。第二のタイプは、要するに“流行作家”だから読まないという、一種の自己規制のようなもので、このタイプの人々は、同じ理由で五木寛之や渡辺淳一や村上春樹も読まないのだ。そして第三のタイプは、筒井康隆の作品が SF とかギャグとかスラプスティックとかいった、えたいの知れない不まじめなものの寄せ集めであって、“人生いかに生きべきか”というテーマをもたない無意味なものであるらしいと予想し、その偏見によって忌避している人々のようだった。

よく考えてみるとこの三つのタイプには共通点があって、いずれも文学あるいは研究における“制度”というものに拘束されている。第一のタイプはかなり無意識的な拘束と言えるが、第三のタイプともなると、まことに強固に自己の中に“制度”を構築してしまっている。つまり、近代文学研究者の多くが筒井康隆を読んでいなかったということは、筒井康隆を“制度”内の作家として認めていない研究者がそれだけ多い、ということの意味するらしい。

社会が幻想であるという想定は、個人が幻想であるという認識を核としていた。人物は、夢や深層心理の人格的な実現として造型されており、そうした人物の相互の関係が、社会的行為を代行していた。ある面において、それは安部公房や福永武彦の試みとも通底していたけれど、ある特定の観念を容認するような不徹底なものでなはかった。そもそも、社会とか個人とか言ったとらえ方は皆無で、発想の根本が違っていた。

こうした認識に基づいて、どんな聖域も構えないという徹底したパロディやギャグが紡ぎ出されていた。小説や詩歌のパラダイムも完全に解体され、それどころか、ことばそれ自体がみごとに分解されてしまっていた。そして SF 的手法とつながる時間・空間の概念の解体もあった。

要するにそこでは、すべてのパラダイムが解体され、崩壊させられていたのだ。そしてその崩壊の底から、人間存在というものの根源的な不安と、それを包む巨大な哄笑とが湧き上がっていたのである。日本の近代文学に対する私の狭い経験の範囲内ではあるが、“文学”にはこんなことまでできるのかという畏怖に似た感覚を、初めて私は抱いた。>

(「筒井康隆・人と作品」柘植光彦(1988) より)

●筒井康隆の作家的影響

〈夢〉を現実と等価値のものとして物語を展開していく作風はユング・フロイトら心理学の影響を大きく受けている。『海』の編集者の埴嘉彦によって中南米文学に出会い、マルケスやリヨサ、コルタサルらの文学にふれる。この刺激は「虚人たち」成立の源となる。イーグルトンやフーコー、ジュネット、バルト、ソシュールらの理論が作品に採り入れられている。演劇・音楽との関わりは幼少時より強く、独特のリズム感など筒井文学の作風に関わる。特に自身ドラムスやクラリネットの奏者であるジャズへの関心は『ジャズ小説』などに結実している。

【まとめ】

筒井康隆の作品の特徴としてよく指摘されるのが、〈SF〉〈ギャグ〉〈スラップスティック〉〈グロテスクな笑い〉といったものです。これは解説にもあるとおり、個人、家族、社会的常識、通俗的な価値観、国家、神仏、などといったあらゆる対象をすべて等価に、作品執筆の対象として徹底的に解体・滑稽化してみせるだけの胆力と筆力があるからこそ、できることでもあります。また筒井は〈言葉〉や〈(人間の)思考〉といったカタチを持たないものまでも、疑ってかかります。筒井作品には安全圏というものがないのです。

このように紹介してみただけでは、ピンと来ないのも無理ないかもしれません。ですから今シーズン、一緒に“七瀬三部作”を読み解いていこうと思います。第二作、第三作と併せて読むことによって、筒井作品に寄せられる評価がだんだん実感としてわかるかもしれません。けれどそれは決して、筒井作品を礼賛しましょう、ということではありません。むしろ、このような指摘を踏まえた上で、丸つきり新鮮な目でひとりひとりがそれぞれ独自に、筒井作品を鑑賞・評価してみてもどんな景色が見えてくるだろうかということに他なりません。完結編ではそのような試みもしてみようと思います。

※参考文献

- ・『新研究資料 現代日本文学 第2巻』（明治書院、2000）
- ・『昭和文学全集 第29巻』（小学館、1988）
- ・『本の森の狩人』筒井康隆（岩波新書、1993）
- ・『現代批評理論のすべて』大橋洋一（新書館、2006）
- ・『小説の技巧』デイヴィッド・ロッジ（白水社）
- ・〈小説『七瀬三部作』暴かれる人間心理 最低で最高の読後感〉
<http://reco.mayokore.org/post-569/>
- ・〈七瀬三部作「家族八景」〉
<http://www.7se-themovie.jp/>

テーマ 《ヒトの心理とエゴを“読む”》

シーズン第3回：9月10日（#51）『エディプスの恋人』筒井康隆（新潮文庫）

